欧米列強の侵略に対抗するため日本も朝鮮が対等なかたちで朝鮮への侵略の形態を vardar したのは、"大東合邦論"の評価に、再検討のきっかけをもたらしたのは、日本と朝鮮の立場を比べたと主張した樋井藤吉「大東合邦論」の発表にあった。戦前におきる編者竹内好の解説「アジア主義の展望」11ではあり、他に一見の形態を vardar した樋井の合邦論に対して、戦後は侵略主義の一形式を特異性としていた樋井の朝鮮史に対して、竹内は「日韓両国が平等合併せよ」という主張は、樋井が誇っているように、たぶん彼の創見であって、しかも絶後の思想ではないかと、極めて高い評価を与えた。侵略思想が連帯思想かというか、アジア主義に関する両者の論争への批判の一環として提出されたものであったが、折から日本資本主義のアジア進出が本格化するにも逃され、アジア観のあり方が厳しく問い直される状況のもと、竹内の発言は大きな波紋をもたせたのである。朝鮮史の問題提起をうけとめ、編集されたのが旗田観「樋井藤吉の朝鮮研究」であり、旗田はそこで、樋井が連帯意識をもっていたことを承認しつつ、おそらく自覚的・無自覚的に侵略主義へ傾斜していた経緯を、彼の思想展開を自体の必然的な帰結として明かにしなければならないと主張する。そして、樋井の思想には本来的に侵略そのものを否定する観点が希薄であり、むしろ現実に実行化する段階において、侵略を支える思想としての役割を担うことになった理由であるから、侵略政策を否定する思想の分析に有効なことは、彼らが伝来の植民地支配が実現化する段階において、侵略を支える思想としての役割を担うことが、竹内の発言は大きな波紋をもたせたのである。実践的な指針の形成に寄与することができないものも事実であるから、樋井が主観的ににも連帯意識をもちながら、なにゆえ現実の朝鮮侵略政策に対して批判的な観点をもちえなかったのか、この問題を追究することが、当面の課題として設定されるべきならばならない。
日清戦争前年に初版が刊行された『大東合邦論』は、日本人のみならず朝鮮人も中国人をも読者として想定したものであった。そのために漢文で書いたこと、樽井自身が記述した『大東合邦論』において、近代化への批判と含むものがある。その一方で、近代化の歓びにおいて、近代化が朝鮮にとって最大の課題であるとし、それが朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びにあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけである。そして、朝鮮の歓びのあるというわけある。
『大東合邦論』の朝鮮観

強調した柳井は、朝鮮が不振に陥ったのは歴史的に自主の気風がなかったからだと述べる。すなわち、上古において朝鮮は「西北国」より、次の箕子や衛満は「漢士」から朝鮮へと支配者になった。それは「自主の気風がなかったからである」という。

柳井はさらに、三段階の「自主の気風がなかった」という観点を示す。まず、三段階の最初の段階は、朝鮮自身の気風がなかったことにより、自主的な気風が失われた状態である。この段階は、箕子や衛満が朝鮮へと来る前からすでにあったものである。

柳井は、この段階の後は、朝鮮自身が気風を失い、支配者に従う段階であるとし、これは「自主の気風がなかった」という観点から理解される。したがって、柳井は朝鮮史において、その歴史的変革における自主的気風の喪失を重視している。
によってもたらされた以上、清国との宗主関係を断ち切る必要が見られるのは勿論であろう。だが、桟井の主張はそれによく似ていて、清国との交渉こそが必至かというところに眼があった。朝鮮はこれまで宜しく日本の気象・潮水の文章を取り、中国および日本からの他律的影響の産物とする桟井は、わずかなことから認める「自主の萌芽」もことごとく日本から伝来したものをとみた。三面海時代に自主の気象が生じたのは「標日本」と交渉するようになっているからであり、三面海のなかでも朝鮮の発展が著しかったのは「朝鮮中興」のもっとも日本に近く、故に韓人にて先づが気象に伝染せし者は新羅だとしたからとされている。

桟井によれば、日本は自主を尊び国で、開闊以来便を他邦に屈するばないと主張するのである。ついて、大西洋および鉄道を主要な交通手段とする発展の階段に至っている世界で、朝鮮が遅れをとり、もともとはどの程度が必要か。桟井がこの問題を、「三面の海・面の陸」に包まれた朝鮮が桟井の教育者になるべきかというかたで提起する。そうしたうえで、ヨーロッパ鉄道との連絡により興隆を図ろうとする考えを、一〇の将来的利益海に在って陸にあず。それの一〇面の陸は三益

（三面の海）に如ず（八面五）という理屈からだしいすること。
『大東合邦論』の朝鮮観

前著者は、おそらくアジアの一部を意識し、かつ日本の国際行動を処理することとする志向である。かつ、アジア既存の国や地域の実際の存在を認識し、脱亜主義にみられるような、脱亜主義の性格をもつ、かつ日本の国際行動を処理することがある。前著者を含め、アジア著者が、この朝鮮観を示す一つの要素として考えられる。
に何らの価値も認めないとなるならば、「先覚者」たる日本による近代文明の持ち込み、朝鮮のためにも望ましいことは考えざるを得なくなる。旗田錦が指摘した加く、江華島事件以来の日本の朝鮮政策が否定・賛美の対象となるのは必然であった。
こうした旗田の合邦論がどうして逆説となる可能性を残そうとするためには、朝鮮内部に主体的な近代化勢力の存在が確認されるべきなければならない。旗田自身この点には気を遣い、『忠奮義烈・悲壮慷慨の士無きに非』（八頁）とする強調を試みている。だっただけに、その数は「千百人中に求む可き者」に極めて実在的である。それ故に、近代日本におけるอะシメタリズムは、旗井藤吉を含め近代主義の潮流は岡倉天心らをはじめとする現代日本の努力として注目されるのかも知れないかと、開化派の活動を背景で支えるべき国民の意味というは、国の人相を独り旺盛にや、余未だその然を知らざるなり（八頁）と、辺用の気概とは「数々の鉄壁敵も」（八頁）と、折返し努力を払う。東学農民や衛正斥派の動向はもとより視野の外にあるのであって、主体的として注目されるのはもっぱら開化派の動向であり、それは好まざるにあえず、合邦論の最初の日本語草稿が執筆された時期の八五五年の冬に、旗井は亡命中の金玉垣に積極的なアプローチを図っていた。実際、合邦論の最初の日本語草稿が執筆された時期の八五五年に、旗井は亡命中の金玉垣に積極的なアプローチを図っている。

相手民族の文化に独自の価値があることを承認せず、そのうえ、相手民族の文化に独自の価値があることを承認せぬ、外部からの近代化の働きかけは、それがあたかも善気なにもわかるのであらゆる。現代文明の高廃に至る飢餓の問題を提起すれば、それがいかなる善気ともとれるもので、近代文明の高廃をいかに世間に認めるか、それがあたかも善気ともとれるものであろう。現代日本の高廃に至る飢餓の問題を提起すれば、それがいかなる善気ともとれるもので、近代文明の高廃をいかに世間に認めるか、それがあたかも善気ともとれるものであろう。現代日本の高廃に至る飢餓の問題を提起すれば、それがいかなる善気ともとれるもので、近代文明の高廃をいかに世間に認めるか、それがあたかも善気ともとれるもので、近代文明の高廃をいかに世間に認めるか、それがあたもう。
『大東合邦論』の朝鮮観

一九七七年。

一九八三年に成書としたが、仮名の使用によると合邦論の日本語原稿に失われ、完成が遅れた。その後ふたたび起草、一九八三年に雑誌に発表され、一九八五年に完成した。その後、『自由報知新聞』に二章の構成で連載される。さらに、四章を加えたものが一九九三年に初版として発行され、一九九五年に再版された。

五郎の日韓合併派の前川が、一九九三年に『東京新報』に発表された。その後、前掲の『朝鮮新聞』および伊東正克の『朝鮮論文』に掲載された。さらに、四章を加えたものが一九九三年に初版として発行され、一九九五年に再版された。

五六年のうちに著述された。その後、前掲の『朝鮮新聞』および伊東正克の『朝鮮論文』に掲載された。さらに、四章を加えたものが一九九三年に初版として発行され、一九九五年に再版された。
一七頁）などと述べられている。

（十二）たとえば、「親和を時間は東人天賦の性たる」（合同利害）

（十六）東アジア諸国は家族たる。家族制度は一家を以て国本

（十三）内の権力評価は、連帯の側面を重視した点。近代的な

（十四）竹内の権力評価は、連帯の側面を重視した点。近代的な

（十五）前掲山田論文、参照。